

私の主張

山形生活が人生の転機に

札幌市東区

守 48歳

東京でサラリーマン生活をしていたある日、突然仕事を手につかなくなる。やりがいもなく、周囲からの疎外感が増していく。

学生時代の友人の顔を思い出しては今の自分は何だろうと考える。心が重く落ち込んでいく感覚に襲われ、そのうちに行動が異常に遅くなっていった。

退職し、知人の紹介で山形県内へ引っ越した。そこでは朝のラジオ体操、日中の農作業、そして早い就寝の繰り返し。初めはおっく

うだった規則正しい生活も、東京を離れたことのない自分にとって、肌で感じる空気が身に染み込んでくるかのように思えた。

すると行動もだんだん早くなってきた。ほとんどの都会人が実現困難になってしまった早寝早起きの生活リズムが身に付いたころ、昨日は青かった実が今日は色づいている農作物の姿が重くなって見えた。

昨日の自分と今日の自分を比べる「縦の比較」が楽しいと気付いた。それは

自分と周囲の人間とを比べていた「横の比較」では感じ取れない不思議な感覚だ。

自分の行動にも楽しさを覚えるようになった。車窓に広がる秋の日本海。沖の雨雲の底から突然真下の海面に向かって黒い二つの突起が現れ、それが2本の柱となり、海面へと延びていく。これが竜巻だと気付いた瞬間、海面からも白いしぶきとなった海水が巻き上がって吸い込まれていった。

私の眼には今も強く残っている。その後、働きながら気象予報士の資格を取得した。これまで受験を考え

「紅葉（もみじ）」の語源は、

染料をぎゅっと揉んで染色する意味の「揉出（もみづ）」という動詞に由来するという説がある。葉が色づく様に似ているからだ。

桜は「花見」というが、「紅葉狩り」はなぜ「狩り」なのだろう。

そもそもこの「紅葉狩り」という風流な遊びは平安時代のころに始まったといわれている。男たちが

気炎

が戻つて旅の元の友人を皆煮を皆煮して、そんな珍味は、言分かつ

たこともなかった資格だ。

の生活があったからこそで私にとって山形での自然と

きたと思う。

若者の声

基督教独立学園高

心を癒やす音楽、大好き

2年 小池勇也

僕は高校生になって初めてピアノに接しました。それまでは音楽にまったく興

味がありませんでしたが、友達の勧めでピアノのレッスンを受けてみることにしました。

初めは音符をまったく読